

取舵

泉鏡花

青空文庫

上

「こりやどうも厄介だねえ。」

観音丸の船員は累々しき盲翁の手を執りて、舢より本船に扶乗する時、かくは眩きぬ。

この「厄介」とともに送られたる五七人の乗客を載了りて、観音丸は徐々として進行せり。

時に九月二日午前七時、伏木港を発する観音丸は、乗客の便を謀りて、午後六時までに越後直江津に達し、同所を発する直江津鉄道の最終列車に間に合すべき予定なり。

この憐むべき盲人は肩身狭げに下等室に這込みて、厄介ならざらんように片隅に踞りつ。人ありてその齡を問いしに、渠は皺わがれたる声して、七十八歳と答えき。

盲にして七十八歳の翁は、手引をも伴れざるなり。手引をも伴れざる七十八歳の盲の翁は、親不知の沖を越ゆべき船に乗りたるなり。衆人はその無法なるに愕けり。

渠は手も足も肉落ちて、赭黒き皮のみぞ骸骨を裹みたる。軀低く、頭禿げて、式ばかりの鬻に結いたる十筋右衛門は、略画の鴉の翻るに似たり。眉も口も鼻も取立てて謂うべき所あらず。頬は太く瘦けて、眼は然と陥みて盲いたり。

木綿袴の條柄も分かぬまでに着古したるを後裏にして、

つぎつぎ ももひき 繼々の股引、泥塗の脚絆、煮染めたるばかりの風呂敷づつみ、敷包を斜めに背負い、手馴したる白櫛の杖と一蓋の菅笠とを膝の辺りに引寄せつ。産は加州の在、善光寺詣の途なる由。

天気は西の方曇りて、東晴れたり。昨夜の雨に甲板は流るるばかり濡れたれば、乗客の多分は室内に籠りたりしが、やがて日光の雲間を漏れて、今は名残無く乾きたるにぞ、蟄息したりし乗客等は、先を争いて甲板に蹶れたる。

かんのんまる 観音丸は船体小にして、下等室は僅に三十余人を容れて肩摩すべく、甲板は百人を居きて余あるべし。されば船室よりは甲板こそ乗客を置くべき所にして、下等室は一個の溽熱き窄廩に過ぎざるなり。

この内に留りて憂目を見るは、三人の婦女と厄介の盲人とのみ。婦女等は船の動くと与に船暈を発して、かつ嘔き、かつうめ、正体無く領伏したる髪の毛の乱に汚穢を塗らして、半死半生の間に苦悶せり。片隅なる盲翁は、毫も悩める気色はあらざれども、話相手もあらで無聊に堪えざる身を同じ枕に倒して、時々南無仏、南無仏と小声に唱名せり。

抜 錨 後二時間にして、船は魚津に着きぬ。こは富山県の良港にて、運輸の要地なれば、観音丸は貨物を積まむために立寄りたるなり。

来るか、来るかと浜に出て見れば、浜の松風音ばかり。

櫓声に和して高らかに唱連れて、越中米を満載したる五六艘

の船は漕寄せたり。

俵の数は約二百俵、五十石内外の米穀なれば、機関室も甲板の空処も、隙間なきまでに積みたる重量のために、船体はやや傾斜を来して、吃水は著しく深くなりぬ。

俵はほとんど船室の出入口をも密封したれば、さらぬだに鬱燠たる室内は、空気の流通を礙げられて、窖廩はついに蒸風呂となりぬ。婦女等は苦悶に苦悶を重ねて、人心地を覚えざるもありき。

睡りたるか、覚めたるか、身動きもせで臥したりし盲人はやにわに起上りて、

「はてな、はてな。」と首を傾けつつ、物を索むる気色なりき。

側かたわらに在るは、さばかり打惱うちなやめる婦女おんなのみなりければ、渠かれの壁かべ訴訟しゅうじゆはついに取拳とりあげられざりき。盲人めしいは本意ほんい無げに眩つぶやけり。

「はてな、小用場こようばはどこかなあ。」

なお応ずる者のあらざりければ、渠かれは困こづじ果てたる面色おももちにてしばらく黙もくせしが、やがて臆おくしたる声音こわねにて、

「はい、もし、誠まことに申兼もうしかねましたが、小用場こようばはどこでございますか
しようかなあ。」

渠かれは頸くびを延のべ、耳そぼだを敬おしえてて誨まを俟まてり。答こたうる者はあらで、婦お女んなの呻うめく声こゑのみ微ほそ々と聞きえつ。

渠かれは居い去ぎりつつ搜さがりよ寄よれば、袂たもとありて手頭てさきに触ふれぬ。

「どうも、はや御面倒ごめんどうでございますが、小用場こようばをお教えなすつて

下さいまし。はいまこと誠に不自由な老夫でございます。」

渠かれは路頭ろとうの乞食こつじきの如ごとく、腰かがを屈かがめ、頭あわれみを下あげて、憐あれを乞あえり。

されどもなお応あずる者はあらざりしなり。盲人めしいはいよいよ途方とほうに暮あれて、

「もし、どうぞ御願ごでございます。はいどうぞ。」

おずおずその袂ひを曳ひきて、惻隱そくいんの情こころを動うかさむとせり。打俯うちふ

したりし婦人おんなは蒼あおしろ白しろき顔かほをわずかに擡もたげて、

「ええ、もう知りませんよう！」

酷むごくも袂たもとを振お払い、再おのれび自家おのれの苦惱もだに悶もえつ。盲人めしいはこの一い喝つかつに挫ひしがれて、頸くびを竦すくめ、肩すばを窄すめて、

「はい、はい、はい。」

中

デッキ
甲板より 帰 来れる 一個の学生は、室に入るよりその 溽
熱に 辟易して、

「こりや劇い！」と眉を 擧めて 四辺を せり。

狼藉に 遭えりし 死骸の 棄てられたらむように、 婦女等は 算
を乱して 手荷物 の間に 横われり。

「やあ、やあ！ 惨 憺たるものだ。」

渠はこの 惨憺さと 溽 熱さとに 面を 皺めつつ、 手荷物 の 鞆の中
より 何やら 取出して、 忙々 立去らむとしたりしが、 たち

まち左右を顧て、

「皆様、これじゃ耐らん。ちと甲板へお出でなさい。涼しくツ

てどんなに心地が快か知れん。」

これ空谷の跫音なり。盲人は急遽声する方に這寄りぬ。

「もし旦那様、何ともはや誠に申兼ねましてございますが、はい、小用場へはどちらへ参りますでございませうか、どうぞ、はい。

……」

盲人は数多渠の足下に叩頭きたり。

学生は渠が余りに礼の厚きを訝りて、

「うむ、便所かい。」とその風体を眺めたりしが、

「ああ、お前様不自由なんだね。」

かくと聞くより、盲人は飛立つばかりに懼びぬ。

「はい、はい。不自由で、もう難儀をいたします。」

「いや、そりや困るだろう。どれ僕が案内してあげよう。さあ、

さあ、手を出した。」

「はい、はい。それはどうも、何ともはや、勿体もない、お難

りがと有う存じます。ああ、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。」

優しくも学生は盲人を扶けて船室を出でぬ。

「どっこい、これから階子段だ。気を着けなよ、それ危い。」

かくて甲板に伴いて、渠の痛入るまでに介抱せし後、

「爺様、まあここにお坐り。下じや耐らない、まるで釜烹だ。

どうだい、涼しかろ。」

「はい、はい、難^{ありがと}有うございます。これは結構で。」

学生はその側^{かたわら}に寝転びたる友に向いて言えり。

「おい、君、最少^{もすこ}しそつちへ寄ツた。この爺^{じいさん}様に半座^{はんざ}を分けるのだ。」

渠^{かれ}は快くその席を譲りて、

「そもそも半座^{はんざ}を分けるなどとは、こういう敵手^{あいて}に用^{つか}う易^{やす}い文句じやないのだ。」

かく言いてその友は投出したる膝^{ひざ}を拊^うてり。学生は天を仰ぎて笑えり。

「こんな時にでも用^{つか}わなくツちや、君なんぎ生涯^{つか}用^{つか}う時は有りやしない。」

「と先言まずツて置おくさ。」

盲人めしいはおそろるおそろるその席わりこに割入わりこみて、

「はい真平まつびらごめん御免下さいまし。はい、はい、これはどうも、お蔭様で助かります。いや、これは氣持よの快よい、とんと極樂でござ
います。」

渠かれは涼風きたの來るごとに念仏して、心窃ひそかに學生の好意しやを謝しやした
りき。

船室あに在りて憂目うきめに遭あいし盲翁めくらおやじの、この極樂淨土ごくらくじようどに仏
性とけしようの恩人と半座はんざを分つ歡喜よろこびのほどは、著しるくもその面貌おももちと
挙動あらわとに露あれたり。

「はい、もうお蔭様で老夫おやじめ助かります。こうして眼も見えま

せん癖くせに、大胆な、単独ひとりで船なんぞに乗りまして、他様はたさまに御迷惑を掛けまする。」

「まったくだよ、爺様じいさん。」

と学生の友は打笑いぬ。盲人めしいは面目めんぼくなげに頭かしらを撫なでつ。

「はい、はい、御ご尤もつともで。実は陸おかを参ろうと存じましてごさいましたが、ついこの年としより者と申すものは、無闇むやみと気ばかり急せきたがるもので、一いつ時ときも早く如来にょらい様が拝まみたさに、こんな不ふり了よう簡けんを起おこしまして。……」

「うむ、無理はないさ。」と学生は頷うなずきて、

「何も目が見えんからといって、船に乘られんという理窟りくつはすこしもない。盲人めくらが船ふねに乘のるくらいは別に驚くことはないよ。僕は

盲目めくらの船頭めくらに邂逅でっくわしたことがある。」

その友は渠かれの背そびらに一撃いちげきを吃くらわして、

「吹くぜ、お株かぶだ！」

学生やつきは躍起やつきとなりて、

「君の吹くぜもお株かぶだ。實際じつじださ、實際じつじ僕の見た話だ。」

「へん、蹙いざりの人力じんりき挽ひき、唾おしの演説家えんせつかに雀盲とりめの巡查しゆさ、いずれも御採

用にはならんから、そう思い給え。」

「失敬しんけいな！ うそだと思おもうなら聞き給たまうな。僕は単独ひとりで話をする

。」

「単独ひとりで話をするとは、覚悟きを極きめたね。その志こころに免ひとくさじて一

條り聞いてやろう。その代りたばこ蓆しきを一本……。」

眼鏡越ごしに学生は渠かれを悪にくさげに見遣みやりて、

「その口が憎いよ。何もその代りと言わんでも、与くれなら与くれと。

……」

「与くれ！」と渠かれはその掌てのひらを学生はななきの鼻頭つきいに突つ出いだせり。学生たは直ただちにパイレットはこの函はこを投付なけたり。渠かれはその一本いっぴんを抽ぬき出いだして、燐マツチもとさぐく枝えだを袂たもとに搜たりつつつ、

「うむ、それから。」

「うむ、それからもないもんだ。」

「まあそう言わずに折角せつかく話わしたまえ。謹きんちよう聴きんちよう々々きんちよう。」

「その謹きんちよう聴きんちようのきんきんの字じは現金げんぎんのきんきんの字じだろう。」

「未いまだ詳まびららかかず。」とその友ともは頭かしらを掉ふりぬ。

「それじゃその苩たばこのを喫のんで謹きんちよう聴し給ええ。」

去年の夏だ、八田はつたがた瀉たね、あすこから宇木村うのきむらへ渡わたつて、能登のとの海浜かいひんの勝しょうを探さぐろうと思おもつて、家うちを出でたのが六月の、あれは十

日……だつたかな。

渡場わたしばに着くと、ちようど乗合のりあいが揃そろつていたので、すぐに乗の

込りこんだ。船頭ふねづかは未だ到いなかつたが、所ところの壮わかいもの者ものだの、娘むすめだの、

女房かみさん達たちが大勢おほいで働はたらいて、乗合のりあいに一箇ひとつずつ折おりをくれたと思おもい給たま

え。見ると赤飯こわめしだ。」

「塩釜しおがまよりはいい。」とその友ともは容喙まぜかえせり。

「謹聴きんちようの約束やくそくじゃないか。まあ聴きき給たまえよ。見ると赤飯こわめしだ

。」

「おや。二個貰ふたつもらツたのか。だから近ちかごろ来はどこでも切符を出すのだ。」

この饒じょうぜつ舌こらを懲こらさんとて、学生は物をも言わで拳こぶしを拳あげぬ。
 「謝あやまツた謝あやまツた。これから真まじめ面目まじめに聴く。よし、見ると赤こわめし飯めしだ。
 それは解わかツた。」

「そこで……」

「食たつたのか。」

「何を？」

「いや、よし、それから。」

「これはどういう事実だと聞くと、長年この渡わたしをやつていた船頭せんとうが、もう年を取とつたから、今度息子むすこに艀ろを譲ゆづつて、いよいよ隠いんき

居よをしようという、この日ひが老船頭、一世いっせい一代いちだいの漕こぎ納おさめだ

というんだ。面白おもしろかろう。」

渠かれの友は嗤せせら笑わらいぬ。

「赤飯こわめしを貰もらったと思つてひどく面白がるぜ。」

「こりや怪けしからん！ 僕こわめしが赤飯こわめしのために面白がるなら、君な

んぞは難有ありがたがツていいのだ。」

「なぜなぜ。」と渠かれは起おき回かえれり。

「その葉卷はまきはどうした。」

「うむ、なるほど。面白おもしろい、面白おもしろい、面白おもしろい話だ。」

渠かれは再び横よこになりて謹きんち聴ちやうせり。学生がくせいは一いっし笑しょうして後件のちだんの

譚はなしを続つづけたり。

「その祝いわいの赤飯こわめしだ。その上に船賃ふなちんを取らんのだ。乗合のりあいもそれは目出度めでたいと言うので、いくらか包んで与やる者もあり、即吟そくぎんで無理に一句浮べる者もありさ。まあ思おもい思おもいに祝いわつてやつたと思おもいたまえ。」

例の饒舌先生はまた呶々どゝせり。

「君は何を祝った。」

「僕か、僕は例の敷島しきしまの道さ。」

「ふふふ、むしろ一つの癖くせだろう。」

「何か知らんが、名歌だツたよ。」

「しかし伺うかがおう。何と言うのだ。」

学生はしばらく沈思ちんしせり。その間に「年波としなみ」、
「八重の潮路しおじ」

「、「渡守」、「心なるらん」などの歌詞はきれぎれに
 打誦うちずんぜられき。渠かれはおのれの名歌を忘却ぼうきやくしたるなり。
 「いや、名歌めいかはしばらく預まつておいて、本文ほんもんに懸かかろう。そうこ
 うしてゐるうちに船頭せんとうが出て来た。見ると疲曳よぼよぼの爺じいさん様さ。ど
 うで隠居いんきよをするというのだから、老としより者は覚悟かくごの前まへだつたが、
 その疲曳よぼよぼが盲めくらなのには驚いたね。

それがまた勘かんが悪いと見えて、船着ふなつきまで手を牽ひかれて来る始末
 だ。無途方むつっぽうも極きれりというべしじやないか。これで波の上なみのうへを漕こ
 ぐ気だ。皆呆みんなきれたね。険難けんなん千方せんぽんな話わさ。けれども瀉かたの事ことだか
 ら川かわよりは平穩へいゑんだから、万まさか一の事こともあるまい、と好ものずき事ことな連れんじゆ
 中ちゆうは乗のつていたが、遁にげた者ものも四五人は有あつたよ。僕こゝろも好こう奇きしん

心でね、話の種たねだと思ツたから、そのまま乗つて出るとまた驚いた。

実に見せたかつたね、その疲よぼよぼ曳めくらの盲者めくらがいざと言いツて櫓柄ろづかを取ると、吃しやつきり然りとしたものだ、まるで別人さね。なるほどこれはその道みちに達したものだ、と僕は想おもツた。もとよりあのくらのかた瀉かただから、誰だツて漕こげるさ、けれどもね、その体度たいどだ、その氣き力あだ、猛もうしよう将じやうの戦たたかに臨かんで馬ま上に槩さくよこたを横よこえたと謂いツたような、凛りんぜん然ぜんとして奪うばうべからざる、いや実にその立派りつぱさ、未だに僕は忘れんね。人が難わけのない事を（眠ねつていても出来る）と言いうが、その船頭ふねづかは全くそれなのだ。よく聞いて見ると、その理はさはず。この疲よぼよぼ曳めくらの盲者めくらを誰たれとか為なす！ 若い時には錢屋ぜにやごへえ五兵衛かかえの抱かかで、年

中千五百石積こくづみを家として、荒海を漕廻こぎまわしていた曲者くせものなのだ。

新潟から直江津ね、佐渡辺あたりは持場もちばであつたそうさ。中ちゆう年うねんから

風眼ふうがんを病わづらつて、盲つぶれたんだそうだが、別に貧乏へんぷつというほどで

もないのに、舟を漕こがんと飯めしが旨うまくないという変物へんぶつで、疲曳よぼよぼ

の盲目めくらで在いながら、つまり洒落しゃれ半分に渡わたをやつていたのさ。

乗合のりあいに話はなし好ずきの爺じい様さんが居いて、それが言いつたよ。上手な船

頭こは手先で漕こぐ。巧こう者しやなのは眼こで漕こぐ。それが名人めいじんとなると、

肚はらで漕こぐツ。これは大おおいにそうだろう。沖はで暴風はやてでも吃くツた時に

は、一寸先は闇だ。そういう場合には名人めいじんは肚はらで漕こぐから確たさ。

生憎あいにくこの近眼ちゆうがんだから、顔かほは瞭はつきり然しか見えなかつたが、啞煙管くわえぎせる

で艫かを押すその持重もちじゆう加減かへん！ 適あつれ見物みものだツたよ。」

饒舌じょうぜつ 先生も遂に口を噤つぶみて、そぞろに興きようを催もよおしたりき。

下

魚津うおづより三日市みつかいち、浦山うらやま、船見ふなみ、泊とまりなど、沿岸の諸しよ駅えきを過

ぎて、越中越後の境なる関せきという村を望むまで、陰晴いんせいすこぶる

常ならず。日光の隠いん顯けんするごとに、天の色はあるいは黒く、あ

るいは蒼あおく、濃こみどり緑りくに、浅葱あさぎに、朱しゆのごとく、雪のごとく、激し

く異状を示したり。

邇ちかく水陸を画かれる一帯の連山中に崛起くつきせる、御神樂嶽飯おかぐらがたけいいとよさ豊とよ

山の腰こしを十重とえはたえ二十重にじゅうじゅうに縋めぐれる灰汁あくのごとき靄もやは、揺曳ようえいして巔いただき

に騰のほり、見みる見る天上はびこに蔓はりて、怪物などの今や時を得んずるに
 はあらぎるかと、いと凄すさまじき気色けしきなりき。

元ふしき来き伏ふ木しき直ち江け津しん間まの航くわ路ろの三さん分ぶんの一いつは、遙はるかに能のう登とう半はん島じまうの庇ひ護ごに
 よりて、辛からくも内うちうみ海みを形かたちつく成なれども、泊とまり以も東とうは全ぜんく洋やう々たる
そとうみ外がい海かいにて、快かい晴せいの日ひは、佐さ渡わた島じまうの糢も糊こたるを見るのみなれば、
しめんびようぼう四し面めん森しん 茫ぼうとして、荒あ波な山やまの崩くずるるごとく、心こころ 易やすかる航くわ
 行かうは一いつ年ねん中ちゆう半はん日じつも有あり難がたきなり。

さるほどに汽き船せんの出しゅつ発はつは大だい事じを取りて、十じゅう分ぶんに天てん気きを信しんずるに
 あらぎれば、解かい纜らんを見合あわせすをもて、却かえりて危おそろ険れくなの虞い寡いしと謂いえ
 り。されどもこの日ひの空そら合あは不ふ幸こうにして見み謬あやまられたりしにあ
 らぎるなきか。異い状じやうの天てん色しよくはますます不ふ穩おんの徴ちやうを表せり。

ひとしきまらちよう 一時魔鳥の翼と翔りし黒雲は全く凝結して、一髪を動

かすべき風だにあらざ、気圧は低落して、呼吸の自由を礙げ、あ

われ肩をも抑うるばかりに覚えたりき。

疑うべき静穩！ 異むべき安恬！ 名だたる親不知の荒

磯に差懸りたるに、船体は微動だにせずして、暈の上を行くが

ごとくなりき。これあるいはやがて起らんずる天変の大頓挫に

あらざるなきか。

船は十一分の重量あれば、進行極めて遅緩にして、糸魚川に

着きしは午後四時半、予定に後ること約二時間なり。

陰※たる空に覆れたる万象はことごとく愁いを含みて、海

辺の砂山に著るき一点の紅は、早くも掲げられたる暴風警戒の

きゆうひよう
球 標 なり。さればや一艘そうの伝馬てんまも来らざりければ、五分間も
とどま
泊らで、船は急進直江津に向えり。

すわや海上の危機は逼せまると覚おぼしく、あなたこなたに散在したり
し数十の漁船は、北にくるがごとく漕こぎ戻もどしつ。観音丸かんのんまるにちかづく
ものは櫓ろづな綱なを弛ゆるめて、この異腹いふくの兄弟の前途を危きづわしげに目送もくそう
せり。

はるか
のう
やがて遙はるかに能生のうを認めたる辺あたりにて、天色そらは俄にわか
おかはなは
陸おかは甚はなだ黒く、沖は真白に。と見る間に血のごとき色は颯さと流れ
たり。日はまさに入らんとせるなり。

ここ一時間を無事に保たば、安危あんきの間を駛はする観音丸かんのんまるは、恙つつが
なく直江津ちやくに着ちやくすべきなり。渠かれはその全力を尽して浪を截きりぬ。

だんだん
 団々として渦巻く煤烟は、右舷を掠めて、陸の方に頹れつつ、
 長く水面に横わりて、遠く暮色に雜わりつ。

天は昏こんぼうとして睡り、海は寂じやくまく寞として声無し。

甲板の上は一時頗る喧擾を極めたりき。乗客は各々生命

を氣遣いしなり。されども渠等は未だ風も荒まず、波も暴れざる

当座に慰められて、坐臥行住思い思いに、雲を觀るもあり、

水を眺むるもあり、遐を望むもありて、その心には各々無限の憂

を懐きつつ、惕息して面をぞ見合せたる。

まさにこの時、衝と舳の方に顛れたる船長は、轟立し

て水先を打噴りぬ。俄然汽笛の声は死黙を劈きて轟けり。万事

休す！と乗客は割るるがごとくに響動きぬ。

観音丸は直江津に安着せるなり。乗客は狂喜の声を揚げ
 て、甲板の上に躍り。拍手は夥しく、観音丸万歳！ 船長万
 歳！ 乗合万歳！

八人の船子を備えたる舢舨は直ちに漕寄せたり。乗客は前後を争
 いて飛移れり。学生とその友とはやや有りて出入口に頭れたり。
 その友は二人分の手荷物を抱えて、学生は例の厄介者を世話し
 て、舢舨に移りぬ。

舢舨は鎖を解きて本船と別るる時、乗客は再び観音丸と船長と
 の万歳を唱えぬ。甲板に立てる船長は帽を脱して、満面に微笑を
 湛えつつ答礼せり。舢舨は漕出したり。陸を去る僅に三町、十分
 間にして達すべきなり。

折からいってんにわかかきくもと吹下す風は海原を揉立つれ
 ば、船はひとささえ一さき支も支ええず矢を射るばかりに突進して、無二無三
 に沖合へ流されたり。

舳櫓ともろを押せる船子は慌あわてず、躁さわがず、舞まい上げ、舞まい下る浪の呼
 吸はかを量りて、浮きつ沈みつ、秘術を尽して漕こぎたりしが、また一
 時ときり暴あれまき増る風の下に、瞻みあぐるばかりの高浪立ちて、ただ一吞
 と屏風倒びようぶだおしに頽くずれんずる凄すさまじさに、剛氣ごうきの船子ふなこも啊あなや呀やと驚き、
かいな腕の力を失う隙ひまに、艦へさきはくるりと波ひかに曳あやうかたぶれて、船は危あやうかたぶく傾かきぬ。
 しなしたり！ と渠かれはますます慌あわてて、この危急あに処はしけすべき手
 段もてあそを失くわだえり。得くわだたりやと、波と風とはますます暴あれて、この舳はしけを
 ば弄もてあそばんと企くわだてたり。

乗合のりあいは悲鳴うちして打騒うちぎぬ。八人の船子ふなこは効無かいき櫓柄ろづかに縋すがりて、
 「南無金毘羅大権現！」と同音どうおんに念どうずる時、洞どうの間の辺まに雷あたりの
 ごととき声ありて、

「取舵！」

舳櫓ともろの船子ふなこは海上鎮護ちんごの神みこの御声ごえに氣ふるを奮ふるい、やにわに艫ろをば
 立直たてして、曳えい々えい声こゑを揚あげて盪おしければ、船ふねは難無なんなく風波ふうはを凌しのぎ
 て、今は我物われものなり、大権現だいこんげんの冥護みょうごはあるぞ、と船子ふなこはたちま
 ち力を得えて、ここを先途せんどと漕こげども、盪おせども、ますます暴あるる
 浪なみの勢いきおいに、人の力かぎりは限有かぎりて、渠かれは身み神しん全ぜんく疲勞つかうして、将まさに昏こ
 倒たうせんとしたりければ、船ふねは再び危あやうく見えたり。
 「取舵！」と雷らいのごとき声こゑはさらに一喝いっかつせり。半死はんじの船子ふなこは

もはやしんめい
最早神明の威令をも奉ずる能わざりき。

学生の隣に竦みたりし厄介者の盲翁は、この時屹然と立ちて、諸肌寛げつつ、

「取舵だい!!」と叫ぶと見えしが、早くも舳の方へ転行き、
疲れたる船子の握れる艫を奪いて、金輪際より生えたるごとくに突立ちたり。

「若い衆、爺が引受けた!」

この声とともに、船子は碇と僵れぬ。

一艘の厄介船と、八人の厄介船頭と、二十余人の厄介客とは、この一個の厄介物の手に因りて扶けられつつ、半時間の後その命を拾いしなり。この老いて盲なる活大権現は何者ぞ。

渠かれはそのそうじ壮時そうじにおいて加賀かがのぜにやないかく銭屋内閣ぜにやないかくが海軍ゆうしやうの雄将ゆうしやうとして、
 北ほっかい海かいの全権しやうあくを掌握しやうあくしたりし磁石じしやくの又また五郎ごろうなりけり。

青空文庫情報

底本：「新潟県文学全集 第二巻 明治編」郷土出版社

1995（平成7）年10月26日発行

底本の親本：「泉鏡花全集」岩波書店

初出：「太陽 創刊号」

入力：高田農業高校生産技術科流通経済コース

校正：小林繁雄

2006年9月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

取舵

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>